

人はそれを運命と呼ぶ

刹那.

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

愛人の娘、純血の名家の息子、孤児。生まれ育った環境も何もかも違う三人の出会い。
愛人の子ゆえ蔑まれ、名家の息子ゆえ打算の中に置かれ、孤児ゆえに哀れまれる。
そんな三人が身分も境遇も関係なしにお互いを認め合い友情を築く。
それは運命の出会い。

はじまり

目

次

はじまり

ステイングレー家・娘の部屋

少女は幾分も感情を乗せない無感動な瞳で、およそ2年間過ごした自室を見渡した。最低限の物だけが置いてある質素な部屋だ。

今日彼女はここを離れる。

彼女が今から向かおうとしているのは、全寮制の特殊な学校だ。暫くは帰つてこない。休暇があるらしいが、家から呼ばれない限り戻つて来るつもりはない。

少女は何も感じない。ここが自分の場所ではないと分かつていたからだ。

彼女の居場所は失われた今まで、そこを取り戻すには世界をひとつくり返さなければならぬことも、十分過ぎるほどに分かつっていた。

「別にいいけど」

何も感じないかのように、乾いた声は呟いた。そして何の未練もなく背を向ける。

その口元には笑みを浮かべていた。それがどういう種類の微笑みなのか少女にも分からなかつた。新しい生活に期待しているのか、全てを諦めているのか、自身を馬鹿にしているのか。

しかし彼女にとつてはそれすらもどうでもいいことだつた。

何もない。

少女は何も持つていない。

レイディアント家・薔薇園

昔から何でも手に入ってきた少年は、自分の力で手に入ってきた物など何一つないと自覚していた。

生きていく上で必要なことは当たり前だが、友人でさえも与えられたものだつた。それでも友人は友人で、大切なもののだが、納得はできなかつた。

誰が悪いとか、何が悪いとか、そんなことではない。

しかし違和感は消えないまま心の片隅にのこつている。

だからこそ、少年は新しい環境に期待していた。もしかしたら何かが変わるかもしない。

誰かから与えられた人生だつたが、これからは自分で選べるのではないか。

少年は静かに目を閉じた。

遠くで誰かが少年の名を読んでいる。時間だ。

踵を帰した少年は笑っていた。

未来に希望を持つ者の微笑みだつた。

孤児院・門の外

少年は幸せそうに笑つていた。

不幸なことなど何もない、この世界は満ち足りているのだと、そう感じさせる笑みだつた。

実際に、彼は本当にそう思つていた。この世界は恐ろしいほどに美しい。その一方で世界はおかしいほどに醜いことも知つていた。

だから少年は世界が好きだ。美しいだけでは死にたくなる。醜いだけなら壊したくなる。

柔らかな微笑みを浮かべていた少年は、ふと、顔から全ての感情を消し去つた。

空を見上げて、飛んでいく鳥を見つめる。

後ろから付き添いの女性が近付いて来る気配がした。

今日、彼はここを暫し離れる。

世界は好きだが、この孤児院は死にたくなるほど大嫌いだ。

それでも、死ななくてよかつた。だからこそ、ここを離れられる。

少年は笑つた。

心底嬉しそうに、
楽しそうに。